

【論 文】

## 昭和戦前期の山陰地域の地主家計と家族生活

—鳥取県西伯郡大幡村の矢田貝家を事例に—

齋藤邦明

### 1. はじめに

本稿の課題は、鳥取県西伯郡大幡村上細見の矢田貝家を事例に、昭和戦前期における中規模地主の家計と生活を検討することである。

本稿に関わる研究としては、後退(衰退)期の地主制研究が挙げられる<sup>1</sup>。その中では、地域や地主経営(規模、事業内容)によって多少の差異はあるものの、20世紀、とりわけ戦間期以降に農工間格差が明瞭となり、地主は資産家として工業や植民地への投資を優先させ、地主経営を徐々に後退させつつも、農地改革まで地主的土地所有が強靱に残存した点が指摘されている。矢田貝家に関しても、戦間期・戦時期に若干の所有地の減少はあるものの、基本的に農地改革まで地主経営を維持していたことを踏まえると、先行研究の指摘が妥当する事例であるといえる。他方で、中小地主研究においては、本稿と同じく家計に言及している研究も少なくないが、地主制研究が盛んだった時期においては消費分野への関心が希薄であったために、家計へは十分な関心が払われずにきた<sup>2</sup>。分析内容に年次の偏りがあったことや、他の家計や公的統計との比較を欠いていたがために、その位置づけが不明確であったこともその一因として挙げられる。

近年の経済史研究においては家計消費に関わる研究が相次いで発表されている。なかでも本稿に関わりが深いのは、地方資産家の家計を分析した中西聡・二谷智子の研究である<sup>3</sup>。中西・二谷の研究では、愛知・富山・大阪・奈良・滋賀の有力な資産家の家計史料を渉猟して、それぞれの家計支出や贈答・寄付の実態を解明している。ただし、その多くが高資産家(高所得)層となっている。日本全国を見れば、矢田貝家のような中小地主層は分厚く存在しており、そうした中小地主層の生活解明は地主制研究の一環であるのみならず、戦前日本農村における国内消費市場の実態を解明することに繋がると考える。そこで、矢田貝家を農村における中高所得世帯の一事例として位置づけることが本稿の目的の一つである。

また、本稿は矢田貝家の分析を通じて、山陰地域の事例研究を行う意図も有している。例えば、近代以降の山陰地域史研究のなかで、明治期の郡是・村是を用いた消費分析があるが<sup>4</sup>、本稿の矢田貝家のような地主文書を用いた研究は非常に限られている<sup>5</sup>。

ここで想起されるのが、古厩忠夫の「裏日本」論である<sup>6</sup>。古厩は新潟などの北陸や鳥取・島根といった山陰は明治の始めまで人口や商品経済の展開において必ずしも遅れた地域ではなかったとし、近代以降の経済発展が太平洋側に集中していく中で、「裏日本」が形成されていったことを論じた。そうした「裏日本」の形成・定着過程の中で「後進性」が強調されるようになり、日本の地域社会の中で「後進」地域として等閑視されるだけでなく、研究対象として

も近現代の山陰地域への関心は後景に退いていったと考えられる。今や「裏日本」といった呼称や認識は過去のものとなったが、なお近現代の地域史研究において山陰地域の研究は相対的に手薄であると言わざるを得ない<sup>7</sup>。こうした状況で近現代の山陰地域にアプローチする際、ア prioriに「後進性」を掲げずに、山陰の地域経済や人々の生活を歴史具体的に明らかにする必要がある。矢田貝家に則していえば、矢田貝家は農村に居住していたものの、その生活は都市・米子とも深く関わりながら展開していた。このように本稿では、矢田貝家の家計や生活を通じて戦前の中小地主の家計実態を把握するだけでなく、日本の地域経済の一つとして山陰地域の特徴を解明したい。

## 2. 矢田貝家の概要と利用史料(日記、現金出納簿)

まず、本稿が対象とする4代目当主の矢田貝顕造(1905~1992)の経歴と家の概略を確認する<sup>8</sup>。顕造は旧制松江高校を経て、京都帝国大学に入学するが、1927年に同法学部を中退した。顕造が16歳(1921年)の時に父・猶治が死去して、家督を相続していたことが学業を断念した背景であった。顕造が相続した時点で地主・矢田貝家は小作地経営と有価証券投資が軸となっていた。また、昭和戦前期に顕造が就いた公職として、大幡村上細見区長(1933~35年、1940~44年)や、大幡村学務委員(1933~46年)、大幡村議会議員(1933~37年、1942~46年)が挙げられる。

顕造は1925年に美世子(1907~1983)と結婚し、京都帝大中退後、大幡村上細見で生活を続けた。顕造が当主になった時点で両親は既におらず(母・澄重は1917年に死去)、その後1934年に二人の弟を相次いで失くしたため、顕造と美世子、そして顕造の子供という核家族となっていた。そして、長男の淑朗誕生(1926年)以降、1928年に由紀子、1930年に滋樹、1931年に浩亮、1934年に淳史、1936年に美智子、1938年に美美子、1939年に治、1941年に準が生まれる。戦後にも一人(1949年・喜久子)が生まれるが、このように矢田貝家は昭和戦前期にはほぼ毎年のように子供が生まれ、6男・3女(戦後に4女)をもうけている点が大きな特徴として挙げられる。子供の出産・育児は顕造と美世子のほかに、女中などによって支えられていたが、本稿では現金出納簿の分析を中心に行うため、矢田貝家以外の人物の関わりについては言及できず、今後の課題として残ることを予め断っておく。

続いて本稿で用いる主な史料「日記」と「現金出納簿」の特徴について触れる。いずれの史料も、顕造が帰村した1928年より作成が開始されており、それ以前の矢田貝家や顕造の動向を包括的に把握できる史料は、現時点では見つかっていない<sup>9</sup>。まず、「日記」は、日々の出来事が詳細に記録されたものであり、顕造の行動とともに顕造周辺の人物や出来事も分かる貴重な資料である。次に、「現金出納簿」は、日ごとの収入・支出を記載した家計簿である。注目すべきは記入方法がほぼ一貫していることである。加えて、収入・支出の項目分類は公的統計の「家計調査」や「農家経済調査」に近い分類をしていること<sup>10</sup>、記帳当初から1940年代までほぼ変更が無いことも特徴として挙げられる。矢田貝家の現金出納簿の収入項目は「A 米代金・家賃」に始まり、全部で9項目(A~I)に分類されている<sup>11</sup>。また支出項目は「1 預金・積立金」に始まり、17項目に分類されている<sup>12</sup>。このように矢田貝家の現金出納簿は非常に整

理されて記帳されており、研究上利用しやすいといえる。

ただし、矢田貝「現金出納簿」で留意すべき点もあり、「飲食費」や「住居費」などに分類すべき支出が、「雑費」や「臨時費」に計上されている。例えば「雑費」の中には飲食(外食など)、保険衛生(散髪)、通信(電報・郵便)などが含まれている。また、「臨時費」には家屋修繕・改築関係、医療費、美術品購入などが計上されている。これらは本来、各費目に分けて再集計すべきものであるが、本稿においては明らかな誤記などを除いて、基本的には顕造が設定した分類ごとに集計・分析を行う。本稿では雑費や臨時費の一部に言及するものの、その詳細な分析は今後の課題である。

本論に入る前にその他で触れておくこととしては、家計収支と現物取引が挙げられる。家計収支は1928～33年まで顕造自身が月毎の収入・支出を集計し記載しているが、34年以降は顕造自身による集計がなくなったため<sup>13</sup>、筆者が集計を行った。なお、年間を通じた収支計算は1928～30年を除くと行われていない<sup>14</sup>。また、「現金出納簿」という史料名の通り、現金の収支しか記載されておらず、現物取引は不明である。矢田貝家が自家消費や贈与贈答が広く見られた農村部に居住していたことを踏まえると、矢田貝家の人々も多数の現物交換・消費を行っていたと考えられる。例えば矢田貝家は養鶏を行っており、卵の自家消費があったと思われるが、現金出納簿上では卵の売却収入は計上されても、自家消費分は計上されていない。このように矢田貝家の現物取引は現金出納簿からは把握できず、今後、日記や書簡などの分析によって補う必要がある点を指摘しておく。

最後に、現金出納簿は簿冊としては1943年まで残されているが、本稿が分析対象とするのは1940年までである。これは現金出納簿の膨大なデータの分析をそこまでしか行えなかったという専ら筆者の能力不足に起因するものだが、他方で1940年代のアジア太平洋戦争が本格化すると、米穀統制をはじめ各種統制政策の影響が強まり、家計の特徴が大きく変わることも挙げられる。本稿では日中戦争期の分析は含まれているが、1940年代以降の分析は未着手であるという限界がある<sup>15</sup>。

### 3. 矢田貝家の家計構造

#### (1) 矢田貝家の家計収入

それでは、矢田貝家の家計の特徴を見ていく。まずは収入から確認する。表1には矢田貝家の家計収入の推移を示した<sup>16</sup>。すでに矢田貝家の概要で触れたように、顕造の時代は地主経営と株式投資(配当金収入)が主軸である。ただし、1930年代に入ると、配当金収入が減少し、1934年には配当金収入はゼロになる。その後1930年代後半になると、再び配当金収入が計上されるようになるが、以前に比べると僅かな額となり、収入の柱ではなくなる。以上から、昭和戦前期の矢田貝家の家計収入では、株式投資から退却し、地主経営(小作地経営)に特化していったことが確認できる<sup>17</sup>。

このことをより明瞭に示すのが、表2の収入比率である。表2を見ると、1920年代末は米代金・家賃が恒常収入に占める割合(A/RI)が6～7割、配当金・債券利札(B/RI)が2～3割を占めていたが、1933年以降は収入のほとんどが米代金・家賃によって占められていることが

表1 矢田貝家の収入

単位：円

収入 年次	(内訳)			恒常収入 RI	臨時収入 EI	総収入 TI
	米代金・家賃 A	配当金・債券利札 B	雑収入 G	小計 (A + B + G)	(1928年 2月～)	(RI + EI)
1928	6,415.22	2,334.68	179.64	10,042.37	1,100.00	11,142.37
1929	6,382.05	2,238.95	195.25	8,816.25	4,378.70	13,194.95
1930	6,011.93	2,128.33	115.53	8,255.79	1,732.49	9,988.28
1931	3,961.70	1,814.44	136.60	5,912.74	7,736.16	13,648.90
1932	2,686.81	693.69	67.85	3,448.35	29,535.14	32,983.49
1933	5,528.33	85.00	88.55	5,701.88	3,803.01	9,504.89
1934	6,023.62	0.00	50.74	6,074.36	4,461.92	10,536.28
1935	3,447.29	55.00	245.10	3,747.39	5,599.80	9,347.19
1936	5,867.36	31.75	32.69	5,931.80	1,612.70	7,544.50
1937	4,331.14	122.18	21.61	4,474.93	747.71	5,222.64
1938	7,372.42	4.25	51.38	7,428.05	3,400.39	10,828.44
1939	11,563.95	13.83	37.94	11,615.72	1,317.08	12,932.80
1940	7,985.73	22.04	39.54	8,047.31	8,107.64	16,154.95

出典：「現金出納簿」各年より作成。

注1：表中のアルファベット (A、B、G) は収入分類に矢田貝顕造が付したものである。

注2：「恒常収入」(RI [Regular Income])、「総収入」(TI [Total Income]) の分類は筆者が便宜的に設定した。

表2 矢田貝家の収入比率

単位：%

年次	米 (A/RI)	配当金 (B/RI)	雑収入 (G/RI)	臨時 (EI/TI)
1928	63.88	23.25	16.33	9.87
1929	72.39	25.40	4.46	33.18
1930	72.82	25.78	6.67	17.35
1931	67.00	30.69	1.77	56.68
1932	77.92	20.12	0.23	89.55
1933	96.96	1.49	2.33	40.01
1934	99.16	0.00	1.14	42.35
1935	91.99	1.47	4.38	59.91
1936	98.91	0.54	2.03	21.38
1937	96.79	2.73	0.48	14.32
1938	99.25	0.06	0.69	31.40
1939	99.55	0.12	0.33	10.18
1940	99.23	0.27	0.49	50.19

出典：表1より作成。

分かる。またその一方で、総収入に占める臨時収入の割合 (EI/RI) が比較的高いことは、矢田貝家の収入が臨時収入に依存していたことを示している。ただし臨時収入は年によって大きく変動しており、不安定でリスクが高かったといえる。

臨時収入の中でも1932年がとりわけ高額となっている理由は次の2点が挙げられる。第1

に、株を売却したことである（1月23日・同25日：安田銀行旧株合計250株12,800円、10月28日：広電旧株20株870円、広電新株39株514.8円、雲電旧株10株475円、勸銀旧株6株402円、米銀旧株7株182円）。日記を見ると、1月の株売却は「銀行ヨリ電話アリ。安田旧株ヲ五一、五〇売ラズヤトイフ」（1932年1月19日）とある。さらに10月には広島電気、出雲電気、日本勸業銀行、米子銀行の株を売却している。日記では「好マザルモ本月末ノ納税金等ノ為必要ニ迫ラル」（1932年10月28日）とあり、税金支払いに備えてのことであったことが分かる。基本的に顕造は株の取引を頻繁に行う人物ではなかった。

第2に、立木を売却したことである（12月1日・同20日：前林立木売却12,250円）。この前林の木売却を巡っては前年の1931年から様々な人々と交渉しており、最終的に森本寛一郎（西伯郡御来屋町）に売却した。

一般にいわれているように、昭和恐慌期の農業・農村経済の悪化に伴い、地主経営も厳しい状況に置かれた。矢田貝家においても、1931～32年にかけて米代金・家賃収入がそれまでの三分の二～半分程度にまで減少し、さらに配当金・債券利札収入も激減したために、これら資産の売却を行ったと考えられる。

また1932年の臨時収入の中には、株や立木売却代に比べれば僅かだが、成牛の売却代も確認できる（10月5日169.12円）。こうした牛など家畜に関わる取引はこれ以降も記録があり、大山山麓地域で生活する矢田貝家も家畜と関わっていたことが確認できる。

その他に臨時収入に関わるものでは、1935年に自作農創設（自創）を利用して田畑の売却をしている（7月1日、田畑売却代 立岩4,028円、8月1日、立岩 2,130円）。すなわち、1930年代

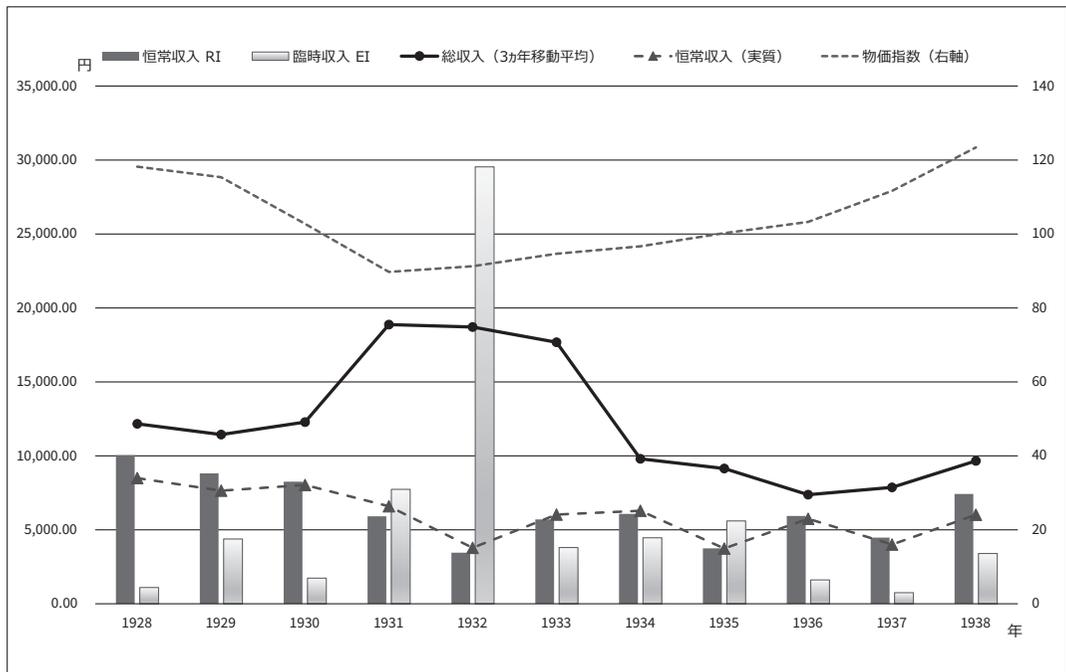


図1 矢田貝家の収入推移と物価  
出典：表1、『長期経済統計8物価』（「農村」）より作成。

は資産の切り売りによって、恒常収入の減少を補う状況であったといつてよい。

なお、1936年・1937年に臨時収入が減少した要因は不明だが、主に計上されているのを見ると、1936年4月8日「西矢麩舎 一棟売却 245円」とあり、これ以降、成牛売却代が現れなくなる。また、「山林売却」を行っていることも確認できる(1936年12月7日355円)。そして、1938年に臨時収入が再び増えたのは、岸本の山林を売却したからであった(1938年1月2日、1,150円、同年2月8日、900円)。加えて講も落札している(同年11月28日、683.89円)。1940年の臨時収入は山林売却と自創による田畑売却とその償還金を得たからであった。1938年以降は日中戦争や1939年の西日本で発生した旱魃などの影響によるものか、米代金が大幅に増加したため、恒常収入は増加している。

続いて、矢田貝家の収入動向をグラフで示したのが、図1である。図1には物価指数のデータが得られる1938年までを表示した。矢田貝家の恒常収入は昭和恐慌期に大幅に減少し、1930年代は後半に至るまで停滞したままである。他方で、物価は1931年以降に持続的に上昇していったため、矢田貝家の実質的な恒常収入は減少していった。総収入については1932年の臨時収入や各年の収入の変動が大きいため、移動平均(3ヵ年)を算出した。株を大量に売却した1932年前後を除けば、総収入は1万円前後で推移していたといえる。

以上を踏まえると、収入面でみた矢田貝家の家計は次のようにまとめることが出来る。第1に1928～30年の、先代の経営を引き継いだ時期(小作地経営と株式投資の二本立て)である。第2に1931～32年の、昭和恐慌の影響を受け、株式投資から退却した時期である。第3に1933年から終戦まで、小作地経営に特化していった時期である。その中で田畑や山林などの資産の切売も行われた(1935年には小作調停との関係で自創を一時的に利用)。そして、本稿の分析には含まれていないが、第4に戦後の1947～48年、農地改革で小作地を失う時期が展望される<sup>18</sup>。

## (2) 矢田貝家の家計支出

続いて、矢田貝家の家計支出を見ていく。この家計支出をまとめたのが、表3である。支出の多いものでいうと、義務費が2,000～3,000円、年による変動が大きい諸払込金が300～3,500円前後、臨時的な支出である臨時費が1,500～15,000円ほどとなっている。支出の合計を見ると、1920年代末は2万円を超える大幅な支出となっているが、1930年代前半には1万円を下回る支出となっており、1920年代までの矢田貝家と1930年代の矢田貝家の家計構造には大きな変化があったといえる。1930年代半ばまで状況は大きく変わらないが、1930年代後半に入ると、支出は1万円近くから1万円超となり、再び家計支出の増大が見られる。これは1930年代末に低迷していた収入が1万円台を回復することと、日中戦争開始による物価高騰の影響などが要因として挙げられる。

ただし、支出に関しては、各費目の経年変化は読み取れるものの、費目ごとにも振れ幅が大きく、そこから家計の特徴はつかみにくい。そこで、農家経済調査を参考に、費目を農家経済調査に合わせて並び替え、各支出の構成比を算出することで家計の特徴を把握したい。

農家経済調査に費目を合わせて、各支出を並べ替えたのが表4である。また参考として、農

表3 矢田貝家の支出（「現金出納簿」記載順）

単位：円

番号	1	2	3	4	5	7	8		9
年	預金、 積立金	諸払込金(株 式・講・保険)	器具費	被服費	図書費	炊事費	電気費	電話費	義務費
1928	160.45	3,679.43	648.24	250.81	315.71	325.98	141.98	0.00	4,166.70
1929	145.65	1,300.20	124.44	163.08	211.72	457.38	137.49	129.41	3,281.57
1930	59.10	1,256.90	63.96	110.28	220.50	497.64	114.06	107.20	3,315.12
1931	25.20	1,252.55	84.52	111.61	114.20	253.44	99.12	96.10	2,455.91
1932	9.10	1,114.10	17.54	48.14	93.60	284.66	105.74	97.75	2,490.32
1933	0.00	286.93	14.53	93.57	57.55	426.41	71.47	106.85	2,519.00
1934	10.00	477.95	67.44	66.98	38.50	470.92	82.79	117.30	2,528.87
1935	0.00	811.29	280.10	246.56	39.89	404.60	75.07	80.55	2,349.39
1936	0.00	673.01	138.13	179.99	78.93	452.34	73.57	72.95	2,251.44
1937	147.00	1,339.11	35.78	204.06	134.71	504.31	73.95	74.90	2,186.88
1938	190.17	1,368.78	114.54	326.40	165.10	542.77	80.46	81.20	2,370.32
1939	795.93	2,455.99	74.14	260.34	99.15	806.54	86.72	72.85	2,501.17
1940	1,127.97	3,451.09	112.12	385.27	57.15	681.95	88.54	80.90	3,058.41
	10	11	12	13	14	15			
年 (上段 続き)	教育費	育児費	雇傭費	交際費	宛口 関係費	雑費	臨時費		支出計
1928	965.72	72.01	584.91	432.69	0.00	705.57	1,697.87		29,457.76
1929	850.85	11.65	732.09	302.47	0.00	529.75	15,477.63		23,855.38
1930	389.50	44.57	667.15	251.42	221.42	386.50	8,559.70		16,265.02
1931	694.95	44.02	401.68	197.77	121.62	287.23	1,580.02		7,819.94
1932	187.18	125.92	394.29	260.38	38.86	304.95	2,744.87		8,317.40
1933	14.99	2.55	223.49	239.66	121.55	310.68	3,666.26		8,155.49
1934	56.93	24.97	235.56	172.03	102.72	308.53	3,314.88		8,076.37
1935	26.50	17.08	913.25	243.06	154.43	415.37	3,647.57		9,704.71
1936	65.31	110.59	372.87	361.69	174.37	297.63	2,434.01		7,736.83
1937	53.89	77.60	328.27	365.45	171.31	292.54	3,137.20		9,126.96
1938	101.46	182.99	583.77	328.96	210.45	408.70	3,032.64		10,088.71
1939	229.41	248.47	745.18	379.19	319.58	426.72	2,813.23		12,314.61
1940	188.54	129.15	1,549.85	601.17	122.45	597.91	4,889.28		17,121.75

出典：「現金出納簿」各年より作成。

注1：各支出項目表頭の上段にある数字は矢田貝顕造が付したものである。

注2：1928年のみ、「養鶏費」52.83円、「衛生費」38.88円との記載があるが、それ以降記載がないため、表には掲載しなかった。

家経済調査のデータを表5に掲載した。これはかつて筆者が参加した、戦前日本の家計消費に関する共同研究成果の一部である<sup>19</sup>。農家経済調査は主として、低中所得層の農家（自作、自小作、小作。表には全体と自作農のみ掲載）を対象とした調査であるため、支出の絶対額では矢田貝家の家計との比較にほとんど意味はなさない。支出額で見たとき、矢田貝家は農家経済調査の農家世帯の10倍ほどの支出となっている。ただし同じ農村部での生活として見たときに

表4 『農家経済調査』の調査項目と対照させた矢田貝家の支出と構成比

農家経済調査項目	総額	住居費	飲食費	光熱動力費	被服費	家具	教育費	修業費	交際費	嗜好費	娯楽費	衛生費	冠婚葬祭費	諸負担	負債利子
	年	総支出	(該当無し)	炊事費	電気費	被服費	器具費	教育費	図書費	交際費	(該当無し)	(該当無し)	衛生費	(該当無し)	義務費
1928	10,399.90	—	325.98	141.98	250.81	648.24	965.72	315.71	432.69	—	—	38.88	—	4,166.70	—
1929	22,409.53	—	457.38	137.49	163.08	124.44	850.85	211.72	302.47	—	—	—	—	3,281.57	—
1930	14,949.02	—	497.64	114.06	110.28	63.96	389.50	220.50	251.42	—	—	—	—	3,315.12	—
1931	6,542.19	—	253.44	99.12	111.61	84.52	694.95	114.20	197.77	—	—	—	—	2,455.91	—
1932	7,194.20	—	284.66	105.74	48.14	17.54	187.18	93.60	260.38	—	—	—	—	2,490.32	—
1933	7,868.56	—	426.41	71.47	93.57	14.53	14.99	57.55	239.66	—	—	—	—	2,519.00	—
1934	7,588.42	—	470.92	82.79	66.98	67.44	56.93	38.50	172.03	—	—	—	—	2,528.87	—
1935	8,893.42	—	404.60	75.07	246.56	280.10	26.50	39.89	243.06	—	—	—	—	2,349.39	—
1936	7,063.82	—	452.34	73.57	179.99	138.13	65.31	78.93	361.69	—	—	—	—	2,251.44	—
1937	7,640.85	—	504.31	73.95	204.06	35.78	53.89	134.71	365.45	—	—	—	—	2,186.88	—
1938	8,529.76	—	542.77	80.46	326.40	114.54	101.46	165.10	328.96	—	—	—	—	2,370.32	—
1939	9,062.69	—	806.54	86.72	260.34	74.14	229.41	99.15	379.19	—	—	—	—	2,501.17	—
1940	12,542.69	—	681.95	88.54	385.27	112.12	188.54	57.15	601.17	—	—	—	—	3,058.41	—
1928	100.0	—	3.1	1.4	2.4	6.2	9.3	3.0	4.2	—	—	0.4	—	40.1	—
1929	100.0	—	2.0	0.6	0.7	0.6	3.8	0.9	1.3	—	—	—	—	14.6	—
1930	100.0	—	3.3	0.8	0.7	0.4	2.6	1.5	1.7	—	—	—	—	22.2	—
1931	100.0	—	3.9	1.5	1.7	1.3	10.6	1.7	3.0	—	—	—	—	37.5	—
1932	100.0	—	4.0	1.5	0.7	0.2	2.6	1.3	3.6	—	—	—	—	34.6	—
1933	100.0	—	5.4	0.9	1.2	0.2	0.2	0.7	3.0	—	—	—	—	32.0	—
1934	100.0	—	6.2	1.1	0.9	0.9	0.8	0.5	2.3	—	—	—	—	33.3	—
1935	100.0	—	4.5	0.8	2.8	3.1	0.3	0.4	2.7	—	—	—	—	26.4	—
1936	100.0	—	6.4	1.0	2.5	2.0	0.9	1.1	5.1	—	—	—	—	31.9	—
1937	100.0	—	6.6	1.0	2.7	0.5	0.7	1.8	4.8	—	—	—	—	28.6	—
1938	100.0	—	6.4	0.9	3.8	1.3	1.2	1.9	3.9	—	—	—	—	27.8	—
1939	100.0	—	8.9	1.0	2.9	0.8	2.5	1.1	4.2	—	—	—	—	27.6	—
1940	100.0	—	5.4	0.7	3.1	0.9	1.5	0.5	4.8	—	—	—	—	24.4	—

農調項目	その他(『農家経済調査』に該当無し)							(実支出以外の支出)		参考値(臨時費を除いた総支出と各構成比)				
	年	電話費	育児費	雇傭費	宛口関係費	雑費	臨時費	養鶏費	預金・積立金	諸払込金(株式・講・保険)	総支出(除臨時費)	炊事費	電気費	被服費
1928	0.00	72.01	584.91	0.00	705.57	1,697.87	52.83	160.45	3,679.43	8,702.03	325.98	141.98	250.81	965.72
1929	129.41	11.65	732.09	0.00	529.75	15,477.63	0.00	145.65	1,300.20	6,931.90	457.38	137.49	163.08	850.85
1930	107.20	44.57	667.15	221.42	386.50	8,559.70	0.00	59.10	1,256.90	6,389.32	497.64	114.06	110.28	389.50
1931	96.10	44.02	401.68	121.62	287.23	1,580.02	0.00	25.20	1,252.55	4,962.17	253.44	99.12	111.61	694.95
1932	97.75	125.92	394.29	38.86	304.95	2,744.87	0.00	9.10	1,114.10	4,449.33	284.66	105.74	48.14	187.18
1933	106.85	2.55	223.49	121.55	310.68	3,666.26	0.00	0.00	286.93	4,202.30	426.41	71.47	93.57	14.99
1934	117.30	24.97	235.56	102.72	308.53	3,314.88	0.00	10.00	477.95	4,273.54	470.92	82.79	66.98	56.93
1935	80.55	17.08	913.25	154.43	415.37	3,647.57	0.00	0.00	811.29	5,245.85	404.60	75.07	246.56	26.50
1936	72.95	110.59	372.87	174.37	297.63	2,434.01	0.00	0.00	673.01	4,629.81	452.34	73.57	179.99	65.31
1937	74.90	77.60	328.27	171.31	292.54	3,137.20	0.00	147.00	1,339.11	4,503.65	504.31	73.95	204.06	53.89
1938	81.20	182.99	583.77	210.45	408.70	3,032.64	0.00	190.17	1,368.78	5,497.12	542.77	80.46	326.40	101.46
1939	72.85	248.47	745.18	319.58	426.72	2,813.23	0.00	795.93	2,455.99	6,249.46	806.54	86.72	260.34	229.41
1940	80.90	129.15	1,549.85	122.45	597.91	4,889.28	0.00	1,127.97	3,451.09	7,653.41	681.95	88.54	385.27	188.54
1928	0.0	0.7	5.6	0.0	6.8	16.3	0.5	—	—	100.0	3.7	1.6	2.9	11.1
1929	0.6	0.1	3.3	0.0	2.4	69.1	0.0	—	—	100.0	6.6	2.0	2.4	12.3
1930	0.7	0.3	4.5	1.5	2.6	57.3	0.0	—	—	100.0	7.8	1.8	1.7	6.1
1931	1.5	0.7	6.1	1.9	4.4	24.2	0.0	—	—	100.0	5.1	2.0	2.2	14.0
1932	1.4	1.8	5.5	0.5	4.2	38.2	0.0	—	—	100.0	6.4	2.4	1.1	4.2
1933	1.4	0.0	2.8	1.5	3.9	46.6	0.0	—	—	100.0	10.1	1.7	2.2	0.4
1934	1.5	0.3	3.1	1.4	4.1	43.7	0.0	—	—	100.0	11.0	1.9	1.6	1.3
1935	0.9	0.2	10.3	1.7	4.7	41.0	0.0	—	—	100.0	7.7	1.4	4.7	0.5
1936	1.0	1.6	5.3	2.5	4.2	34.5	0.0	—	—	100.0	9.8	1.6	3.9	1.4
1937	1.0	1.0	4.3	2.2	3.8	41.1	0.0	—	—	100.0	11.2	1.6	4.5	1.2
1938	1.0	2.1	6.8	2.5	4.8	35.6	0.0	—	—	100.0	9.9	1.5	5.9	1.8
1939	0.8	2.7	8.2	3.5	4.7	31.0	0.0	—	—	100.0	12.9	1.4	4.2	3.7
1940	0.6	1.0	12.4	1.0	4.8	39.0	0.0	—	—	100.0	8.9	1.2	5.0	2.5

出典：「現金出納簿」より作成。

注1：総支出は、「預金・積立金」および「諸払込金(株式・講・保険)」以外の各支出を合計したもの。

注2：支出項目の並び順は、農商務省農政局「自昭和七年度至昭和十六年度 年次別農家経済調査成績」を参考にした。

一定の参考にはなると考え、構成比などを中心に比較として用いる。

一見してわかるように、農家経済調査と対比させると、矢田貝家の現金出納簿は住居費・嗜好費・娯楽費・負債利子などに該当する費目がない。これらは雑費や臨時費などに計上されて

表5 農家経済調査における農家の家計費

対象 (単位)	年次	総額	第一生活費						第二生活費									
			住居費	飲食費	光熱 動力費	被服費	家具	教育費	修養費	交際費	嗜好費	娯楽費	衛生費	冠婚 葬祭費	諸負担	負債 利子	その他	
全体	1932	558.8	20.7	256.2	31.6	44.8	15.0	10.0	6.5	46.4	27.0	3.0	25.7	25.2	10.2	13.0	23.5	
	1933	606.2	20.3	265.1	34.3	55.5	16.8	11.4	6.8	50.3	28.6	4.2	31.7	34.7	11.2	11.9	23.3	
	1934	637.7	21.5	295.0	32.2	53.7	15.2	11.8	6.7	50.0	26.9	3.9	37.2	38.2	11.3	11.6	22.6	
	1935	705.2	22.9	328.4	33.1	64.9	19.9	14.4	7.1	53.1	29.3	4.3	30.4	50.8	11.4	11.2	24.1	
	1936	763.0	25.5	353.2	34.0	72.8	23.6	13.6	8.6	60.6	31.1	5.1	35.0	51.2	12.4	9.6	26.9	
	1937	786.3	22.6	375.2	34.1	71.7	21.7	15.7	8.9	65.4	32.3	4.0	40.8	44.4	10.9	8.0	30.4	
	1938	857.7	23.7	408.7	40.8	85.9	24.8	18.7	9.4	69.3	31.4	6.1	43.6	42.9	10.4	8.5	33.7	
	1939	1072.8	25.4	489.7	48.9	118.9	29.6	24.9	11.4	88.1	45.9	7.6	54.2	67.5	11.5	5.6	43.7	
	1940	1304.2	34.2	583.1	59.9	150.5	42.2	26.5	18.8	104.8	55.8	13.7	65.2	72.2	11.8	4.9	60.6	
	1941	1387.4	38.3	621.6	64.7	171.9	46.8	32.8	18.4	95.5	56.2	13.4	73.8	78.2	13.3	3.5	59.1	
自作農	1932	631.6	27.6	270.2	34.0	53.5	16.3	11.1	9.7	59.3	31.7	3.8	31.3	30.6	14.2	12.9	25.4	
	1933	694.1	25.4	284.8	39.1	64.2	19.8	13.6	9.4	61.6	34.7	6.5	37.6	43.1	15.6	11.8	27.0	
	1934	679.8	23.2	304.7	35.0	59.6	17.6	14.5	9.7	57.1	31.3	5.2	42.5	25.7	15.7	9.8	28.1	
	1935	793.8	26.6	334.2	37.2	76.3	24.3	22.2	10.1	59.0	33.9	5.1	39.7	69.6	15.3	11.9	28.3	
	1936	841.2	31.5	357.2	38.3	86.0	26.1	19.3	10.5	68.3	35.0	6.2	43.8	63.9	16.7	8.2	30.2	
	1937	892.8	27.3	395.7	37.0	84.1	30.8	20.1	12.0	78.9	38.8	6.0	43.1	59.7	14.2	7.1	37.9	
	1938	938.3	27.6	427.2	47.9	95.4	32.7	20.6	11.6	80.0	31.6	7.3	41.7	57.7	14.0	7.8	35.2	
	1939	1182.5	28.4	506.5	56.5	129.5	31.3	38.9	15.4	96.4	49.4	10.2	67.4	82.5	14.6	4.1	51.6	
	1940	1401.6	44.0	590.8	65.3	169.3	41.4	34.4	25.0	121.2	57.8	14.9	76.3	69.3	16.6	5.4	70.4	
	1941	1513.9	38.5	665.4	64.2	192.9	56.5	39.9	21.8	114.1	59.7	15.2	79.3	71.8	20.3	4.1	70.3	
全体	1932	100.0	3.7	45.8	5.7	8.0	2.7	1.8	1.2	8.3	4.8	0.5	0.5	4.5	1.8	2.3	4.2	
	1933	100.0	3.3	43.7	5.7	9.2	2.8	1.9	1.1	8.3	4.7	0.7	0.7	5.7	1.9	2.0	3.8	
	1934	100.0	3.4	46.3	5.1	8.4	2.4	1.8	1.0	7.8	4.2	0.6	0.6	6.0	1.8	1.8	3.5	
	1935	100.0	3.2	46.6	4.7	9.2	2.8	2.0	1.0	7.5	4.1	0.6	0.6	7.2	1.6	1.6	3.4	
	1936	100.0	3.3	46.3	4.5	9.5	3.1	1.8	1.1	7.9	4.1	0.7	0.7	6.7	1.6	1.3	3.5	
	1937	100.0	2.9	47.7	4.3	9.1	2.8	2.0	1.1	8.3	4.1	0.5	0.5	5.7	1.4	1.0	3.9	
	1938	100.0	2.8	47.6	4.8	10.0	2.9	2.2	1.1	8.1	3.7	0.7	0.7	5.0	1.2	1.0	3.9	
	1939	100.0	2.4	45.6	4.6	11.1	2.8	2.3	1.1	8.2	4.3	0.7	0.7	6.3	1.1	0.5	4.1	
	1940	100.0	2.6	44.7	4.6	11.5	3.2	2.0	1.4	8.0	4.3	1.0	1.0	5.5	0.9	0.4	4.6	
	1941	100.0	2.8	44.8	4.7	12.4	3.4	2.4	1.3	6.9	4.0	1.0	1.0	5.6	1.0	0.3	4.3	
自作農	1932	100.0	4.4	42.8	5.4	8.5	2.6	1.7	1.5	9.4	5.0	0.6	0.6	4.8	2.2	2.0	4.0	
	1933	100.0	3.7	41.0	5.6	9.2	2.8	2.0	1.4	8.9	5.0	0.9	0.9	6.2	2.2	1.7	3.9	
	1934	100.0	3.4	44.8	5.1	8.8	2.6	2.1	1.4	8.4	4.6	0.8	0.8	3.8	2.3	1.4	4.1	
	1935	100.0	3.3	42.1	4.7	9.6	3.1	2.8	1.3	7.4	4.3	0.6	0.6	8.8	1.9	1.5	3.6	
	1936	100.0	3.7	42.5	4.6	10.2	3.1	2.3	1.3	8.1	4.2	0.7	0.7	7.6	2.0	1.0	3.6	
	1937	100.0	3.1	44.3	4.1	9.4	3.5	2.2	1.3	8.8	4.3	0.7	0.7	6.7	1.6	0.8	4.2	
	1938	100.0	2.9	45.5	5.1	10.2	3.5	2.2	1.2	8.5	3.4	0.8	0.8	6.2	1.5	0.8	3.8	
	1939	100.0	2.4	42.8	4.8	11.0	2.6	3.3	1.3	8.2	4.2	0.9	0.9	7.0	1.2	0.3	4.4	
	1940	100.0	3.1	42.1	4.7	12.1	3.0	2.5	1.8	8.6	4.1	1.1	1.1	4.9	1.1	0.4	5.0	
	1941	100.0	2.5	44.0	4.2	12.7	3.7	2.6	1.4	7.5	3.9	1.0	1.0	4.7	1.3	0.3	4.6	

出典：農商務省農政局「自昭和七年度至昭和十六年度 年次別農家経済調査成績」より作成。

注1：自作農より相対的に所得水準が低い自作小作農・小作農は掲載しなかった。

いることは既に述べた通りである。そのことを踏まえつつ、各費目の特徴を見ていく。

まず、農家経済調査と比べると、矢田貝家は衣食住の比率が非常に低い。これは当初、家族員数が少ないことや、先に述べた衣食住の費用が雑費や臨時費に含まれていることが要因として挙げられる。例えば、矢田貝家の炊事費は300～500円ほどであるが、これは自作農の飲食費支出額と大差ない。被服費は年による変動が大きく、農家経済調査の農家と比べると多額となっている。ただし、農家経済調査の自作農が1936年の支出総額841.2円に対し被服費86円(構成比10%)であるのに対し、同じ年の矢田貝家は支出総額7,063.82円に対し被服費179.99円(構成比2.5%)となっており、構成比レベルで農家の1/4程度に被服費が抑えられていることを示している。在村不耕作地主である矢田貝家は基本的には室内着で済むのに対し、農家は農作業などの野良仕事を行うために衣類の損耗も激しかったことから、農家の方が相対的に家計費に

占める被服費の割合が高くなっていたと考えられる。矢田貝家では既製服(シャツ、オーバーなど)もある程度購入しているが(例:1932年2月10日シャツ2円35銭)、多くは糸や綿などの衣料原材料を購入していることから、家族や女中の家事労働で補っていたと考えられる<sup>20</sup>。1930年代半ば以降になると、矢田貝家では子供が増え成長していったことから、飲食費(炊事費)や被服費が徐々に増加していった。

続いて光熱費(電気費)を見ると、農家経済調査の農家の支出よりは矢田貝家の支出は高額ではあるが、大きな差ではない。矢田貝家の方が多額となっているのは、一般農家よりも矢田貝家の屋敷は大きく、部屋数も多いことから、その分だけ光熱費が多くなっていると考えられる。また農家経済調査には該当項目がなく、矢田貝家の支出に表れているものとして「電話費」がある。顕造が矢田貝家を継いだ時点で屋敷に既に電話が引かれていた。

家具費(器具費)は、先に述べた光熱費と同様、矢田貝家の屋敷規模と比例して、矢田貝家の方が多額の支出となっている。農家経済調査は農家の家具支出は平均値で算出されているため、大きな変動が見られないが、矢田貝家は年による変動が大きい。特に1928年と1935年の支出が多額となっている。1928年は、洋服棚(3月3日30円)、本棚(同26円)、「ラージ新台」(詳細不明、同140円)、葎障子(同6月30日25.5円)、「電熱工事費(玄関火鉢)他」(7月5日10.32円)、「輪島塗菓子椀二十人前」(8月31日120円)、「Radio 修繕器具料・用品代」(9月3日2.7円、9月26日16円)、「伊万里焼 煎茶器・番茶器・香炉・香合」(12月7日68円)などが主だった支出として見られる。ここから1928年は顕造が大幡村に帰村して、生活を開始するための支出であったことが分かる。続いて1935年を見ると、瓦代(5月16日11.8円、7月27日67.79円、10月14日27.21円)、扇風機代(11月25日26円)など家の増改築・修繕による費用と、新たな家電製品の導入が見られる。

教育費は農家経済調査と比較すると、矢田貝家は非常に多額で、構成比で見ても1931年までは家計費の3~10%を占めるほどとなっている。それが1932年以降で大きく変わる理由は、顕造の弟である清茂・正巳が1932年頃から病に伏せて、1934年に死去してしまうためである。1931年までは第二人の学資(月払)のほか、正巳の高校受験料(松江高校、1931年1月19日5円、3月15日16円)、小使(遣)・送金などが見られる。弟死去後は、矢田貝家には幼い子供しかなかったため、教育費は大幅に減少する。その後、顕造の子供が成長すると、教育費は次第に増加していった。

修養費(図書費)についても、矢田貝家の支出額は農家経済調査対象農家よりも多額となっている。矢田貝家では新聞を複数取り(大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、山陰日日新聞など)、多種多様な図書(法学書、文学集や美術書、児童書など)、雑誌(主婦之友など)を購入していることが確認できる。これらは、旧制高校卒・帝大中退という経歴をもった顕造の教養の高さを表している。教育費・修養費をあわせてみると、矢田貝家は教育投資を熱心に行っていた家であったといえよう。実際、顕造の長男である淑朗は後に東京帝国大学に入学、卒業して国鉄官僚になった<sup>21</sup>。

交際費も一般的な農家とは比較にならないほど多額の支出で、構成比で見ても3~4%前後とコンスタントな支出となっている。とりわけ1936年以降に支出額で300円以上となり、構成

比でも5%前後へと増加する背景は、神社・団体への寄付や帝国軍人後援会(1936年6月2日25円)、入営餞別など公職関係の支出が増えるためである。この点は中西・二谷らの資産家研究でも指摘されているように、「名望家」として地域社会との関係性による寄付行為という性格を有しているといえる。これに関連して、矢田貝家の家計支出の中でも目を引くのは、諸負担(義務費)の大きさである。この支出が全体の3割ほどを占めていた。これは地租に加え、区費、水利費など地主経営の経費という側面を持っていた。

以下、農家経済調査に該当項目がない費目を確認する。まず、育児費について、これは農家経済調査では「飲食費」「教育費」「衛生費」「その他」などに分類されているものと考えられる<sup>22</sup>。育児費については現金出納簿への記載方法も他の費目とやや異なる点があり、育児費は後から追記で計上されている箇所がしばしば見られる(1月から12月までの記録の後に、記録漏れのようなかたちで記録されている)。こうした記載の仕方はすべての年次ではないが、複数の年で確認できることから、おそらくは家族や女中に育児費として幾ばくかお金を渡して、事後的に支出内容を報告させたのではないかと推察される。育児費では、牛乳代、ドライミルク(「パトローゲン」「ラクトーゲン」)、玩具、絵本、おしめ、おやつ(さつま芋、飴など)が見られる。矢田貝家の出産は後に詳しく見るが、とりわけ支出頻度が多いのは牛乳代とドライミルクである。既に述べたように、矢田貝家は短期間のうちに多子となったことにより、母乳のみで育児をすることが困難であり、米子などで牛乳・ドライミルクを購入することによって多子育児に対応していた<sup>23</sup>。

雇用費は年によって変動があるが、1935・40年は諸負担・臨時費を除いて最も高い比率(10%超)となっている。出納簿を見ると、女中や小使への謝礼のほか、子守、大工、石工、左官などの文字が見えることから、家事と家の増改築と関係した支出であった<sup>24</sup>。

最後に、宛口関係費が1936年頃より1%から2%ほどへと上昇しているのは、「小作米調停費用」や堤防などの工事費用が計上されているためである。

矢田貝家の家計支出をまとめると、以下のような特徴が指摘できる。第1に、矢田貝家の支出では諸負担と臨時費が最も多い。第2に、1930～32年の昭和恐慌期に大きな転機があったといえる。これは収入において株式や山林の一部を売却して、小作地経営に特化していったことと対応している。第3に、顕造の弟の病と死によって家計の支出のあり方が大きく変化したということである<sup>25</sup>。それは教育費の減少というかたちで現れた。第4に、家計に変化を及ぼした要因は、家族人員の変化、家長である顕造の職務、地主・小作関係の変化(小作争議)、家の増改築などが挙げられる。第5に、支出を抑制している費目が見られたことである(被服など)。

### (3) 臨時費と住居関連支出に関して

臨時費は度々言及しているように、その内訳は極めて雑多である。その考察は今後の課題であると述べたが、1929年の臨時費(15,477.63円)は他の年と比べても突出して高く、この点のみ触れておきたい。

また、矢田貝家の家計支出では「住居費」に該当する支出項目が設定されておらず、臨時費

などに含まれていることを述べた。ただし今日、矢田貝家に関して地元を中心に最もよく知られていることは、登録有形文化財となった矢田貝家の邸宅についてである。この邸宅に関する家相図や顕造日記に現れる「大工」などの建築関連用語の考察は行われているが<sup>26</sup>、家計費との関係でいえば、矢田貝家邸宅の建設費用はどの程度であったのかという点は本稿で検討すべき事項である。そこで矢田貝家邸宅で大工が最も出入りをし、増改築を行っていたと考えられる1932年に限定して、住宅関連支出を再集計し、矢田貝家における住居費水準を考察する。

まず1929年の臨時費は他の年次が3,000円前後であるのに対して、その5倍近くの支出となっている。現金出納簿を確認すると、同年8月末～9月にかけて「西矢ヨリ不動産引受登記料」が10,554.76円（8月30日に登記料など154.76、9月1日に1ヶ所10,400円）が計上されているためである。この西矢というのは日記によれば「西矢喬一郎」とも書かれており、これは義理の伯父である矢田貝栄造（通称 西矢田貝家）の長男・矢田貝喬一郎だと思われる。顕造はこの西矢の借金の保証人となっていたようである。西矢の借金はすでに1928年から問題となっていて、日記の中では「西矢問題」として、その年末の記事に「一年ハ暮レタレド一家ノ財政ハ尚益々多事ナラントス」とする中で言及されている（「日記」1928年12月31日）。そして、1929年6月19日の記事に「西矢ノ例ノ山陰銀行事件ニツキ来ル。而シテ昨夜井上ト話セシ如ク。一先ヅ延期シ貫ヒ整理ノトキ支払ウ様願フコト、ナス由。又前田ヨリ借リタル一万円ノ件ハ段ノ原ヲ売リテ一万五千位アラシカ。サレバ、一万ハ銀行ニ返還シ残五千ヲソレニ宛テ不足額ハ小生ガ西ノ不動産全部ヲ担保トシテ買受ケタル」として、西矢の借金の返済の一部を顕造が肩代わりする代わりに、西矢が担保としていた不動産を買い受けることとなったことが記されている。続く6月26日には「執達吏来リ。株券 米子自動車78株、米子銀行新5株、広電39株ヲ差押フ。計1,500円余（西矢喬一郎1,700保証ノ為）。上記ノ如ク執達吏来リ気ノ毒ナレドモトテ差押ウ」として、西矢は借金が返済できず、差押を受けたことが記されている。また、7月31日の記事に、「清茂井上ト西ニノ対策ヲ考ヘ即チ段ノ原売上金ノ中ヨリ二千円位ヲ小生ノ方ニ取り他ハ勝手ニ西ノ処分トシ山陰銀行其他一切ノ債務ヲ弁済スルコト、シ小生ハソノ二千円及家屋敷他ノ田畑山林等ヲ八千円トシテ買受ケ結局前田ヨリ借入ノ一万円ヲ引受クルコト、意見一致シ西伯父ニ井上ヲ以テ交渉シタル処ソレニテ快ク納得セル」とあり、こうして西矢の不動産の買受が決定した。

続いて、1932年の不動産関連支出を確認する<sup>27</sup>。矢田貝家の住宅関連支出のうち、「器具費」は計上されているものの、増改築・修繕費用が「臨時費」に分類されている。また矢田貝家の住宅関連支出において重要なのが大工や左官などへの支払いで、これは「雇用費」に計上されている。そこで臨時費および雇用費から住宅費関連の支出をまとめたのが、表6である<sup>28</sup>。雇用費中の住宅関連支出は157.15円、臨時費中の住宅関連支出は240.63円で、両者を合わせると、344.12円である。ここに器具費17.54円を合わせると、1932年の矢田貝家の住宅関連支出は415.32円となる。支出費に対する割合は5%であり、これは雑費や臨時費といった雑多な費目を除くと、矢田貝家の家計の中では比率の高い支出であったといえる。また同じ年の農家経済調査の農家（自作農）は住居費27.6円、家具16.3円で、住宅関連支出は43.9円（構成比7%）であったから、支出額では9.4倍、構成比では矢田貝家の方がやや下回る水準である。以上を踏

表6 雇用費・臨時費に含まれる住宅関連支出

「雇用費」中の住宅関連支出			「臨時費」中の住宅関連支出		
日付	摘要	金額 (円)	日付	摘要	金額 (円)
2.2	岩田大工 4人 便所	4.80	1.25	表具代	4.00
2.2	同人	15.20	4.10	松の木代 酒五升金1円	1.00
2.2	左官 1人	1.40	4.14	茶室用金具	5.50
2.5	前ノ大工	1.30	4.18	金木屋 1本	1.20
2.5	芳吉 内6. — 便所	10.00	4.3	枋 安岡払6束代	3.84
4.5	屋根屋払	3.50	5.5	瓦代 茶室用 岸本2.14 溝口1.10	3.24
4.6	岩田大工	10.00	5.20	釜ニヶ鑑定修繕料ノ内 大西浄長	50.00
4.14	植木屋払	5.50	6.80	便所用便器其他 安来屋19.68ノ内払	15.00
4.30	大山払	2.16	6.15	表具料	0.50
5.3	岩田大工	5.00	7.2	枋代 一束 大山屋	0.64
5.1	金田大工	3.00	7.9	釜修繕	18.95
5.3	岩田大工	7.00	7.26	金物 便所用其他	1.69
6.4	金田大工	1.00	7.29	ガラス代 便所	1.40
6.5	植木屋	5.00	7.31	杉板二間	2.70
7.2	大山屋払 済 2人3分代ノ内	1.06	7.31	金網 便所	0.40
7.27	光大工渡 菅田庵見学費	1.00	8.4	便所用便器	4.14
7.31	寿大工	1.00	8.14	便所壺蓋金具	0.15
8.3	光大工渡	0.40	8.14	便所用杉材代	2.00
8.13	光大工渡	10.00	9.13	裏座敷破子戸用 ガラスレール戸車	7.33
8.13	金田時払	5.00	9.22	ラジオ修繕料	10.00
8.13	植木屋 長田克己 礼	1.00	9.29	ブリキ屋払 茶室其他兩樋 中藤	8.50
8.14	左官払	7.80	10.28	桧丸太三本 茶室廂用	1.50
8.14	寿大工払	7.56	11.20	蔓 茶室廂用	0.05
8.14	寿大工 請負 6.45人	3.22	12.4	表具賃 栗木	1.00
9.17	岩田大工	1.00	12.2	松角柱 三寸角 十四尺	3.30
9.21	岩田大工	0.25	12.13	踊口金具	0.55
9.22	岩田大工	3.00	12.29	表具賃 栗木	0.70
10.14	岩田大工払	2.00	12.29	(判読不能、茶室関係)	2.75
10.23	植木屋 長田克己	5.00	12.29	扁額	11.50
11.25	植木屋 永野ほか	28.00	12.29	笠	3.00
11.28	中藤払	3.00	12.29	炮烙	1.00
12.1	中藤払	1.00	12.29	灰提 茶室用	0.50
12.21	砂取 2名 長田克己	1.00	12.30	輪島火鉢 定紋散 四本代ノ内 浜田宗市	40.00
			12.30	花崗石燈籠	30.00
			12.30	杉植代	1.60
			12.31	アース用銅線、板	1.00
	合計	157.15		合計	240.63

出典：「現金出納簿」より作成。

まえると、顕造による邸宅の増改築・修繕はたしかに多額の費用が投じられているものの、支出水準(比率)でいえば一般農家と遜色なく、家計規模に見合ったものであったといえる。細かく見ると、雇用費では大工へ頻繁に支払いを行っていることが分かる。ただし、その多くは少額であった。臨時費では便所の修繕と茶室関連の支出が確認できる。とりわけ茶室の関係には比較的多額の費用を投じている(5月20日「釜二ヶ鑑定修繕料ノ内 大西浄長」50円、12月30日「輪島火鉢 定紋散 四本代ノ内 浜田宗市」40円など)。このように矢田貝家の邸宅は、家計に無理を生じさせない範囲で整備拡充され、鳥取県内でも貴重な文化的建造物と庭園を備えるに至ったのである。

#### (4) 矢田貝家の家計収支

矢田貝家の家計収支を確認する。それをまとめたのが表7である。収支を見てみると、昭和恐慌前後の2ヶ年(1929・30年)と1937年を除けば、多くの年で収支はプラスとなっている。よって、矢田貝家は堅実な経営だったと評価できる。ただし、積立金・預金を見ると、1932年から1936年の間はほとんどの年がゼロないし一桁となっており、1930年代の初頭から半ばにかけては、矢田貝家の家計運営は相対的に厳しい状況であったことが見て取れる。収入で確認したように、その時期、顕造は株や山林の売却など資産の切り売りで対応していた。

表7 矢田貝家の収支、預金、貸借

年次	総収入	総支出	収支	積立金 預金	諸払込金(株 式・講・保険)	借入金		貸付金	
						借入額	償却金	貸付額	回収金
1928	11,142.37	10,399.90	742.47	160.45	3,679.43	17,405.76	12,355.07	2,862.91	1,866.89
1929	13,194.95	22,409.53	▲ 9,214.58	145.65	1,300.20	35,490.09	24,887.74	1,766.26	1,805.20
1930	9,988.28	14,949.02	▲ 4,960.74	59.10	1,256.90	33,470.95	26,989.60	361.95	545.67
1931	13,648.90	6,542.19	7,106.71	25.20	1,252.55	40,236.48	46,125.77	722.69	479.15
1932	32,983.49	7,194.20	25,789.29	9.10	1,114.10	5,329.81	32,453.45	434.07	1,523.21
1933	9,504.89	7,868.56	1,636.33	0.00	286.93	2,686.62	3,595.40	228.05	301.45
1934	10,536.28	7,588.42	2,947.86	10.00	477.95	2,005.00	3,612.57	1,185.14	775.82
1935	9,347.19	8,893.42	453.77	0.00	811.29	10,381.19	13,707.34	754.10	1,258.71
1936	7,544.50	7,063.82	480.68	0.00	673.01	1,000.00	2,476.94	664.18	235.17
1937	5,222.64	7,640.85	▲ 2,418.21	147.00	1,339.11	13,881.51	8,984.34	304.88	1,163.16
1938	10,828.44	8,529.76	2,298.68	190.17	1,368.78	3,961.78	5,004.32	401.37	277.26
1939	12,932.80	9,062.69	3,870.11	795.93	2,455.99	7,698.03	10,564.03	1,191.65	523.92
1940	16,154.95	12,542.69	3,612.26	1,127.97	3,451.09	12,702.88	14,087.37	1,407.23	1,114.48

出典：「現金出納簿」各年より作成。  
注：表中の「▲」はマイナスを表す

最後に、矢田貝家の家計分析(現金出納簿)の限界面として、各年における資産の保有状況を把握できなかったことが挙げられる。すなわち、積立金、預金、借入金、貸付金それぞれの残高は現金出納簿には記載されておらず、総じてマネーストックを把握できていないという限界を抱えており、この点も今後の課題として残されている。

#### 4. 矢田貝家の家族生活：出産に着目して

ここからは出産時の消費や行動に着目して、矢田貝家の家族生活の一端を明らかにしたい。既に触れたように、矢田貝家は顕造の代に親や弟がいない状況で、度重なる出産を経験していた。そこで、出産にどのように対応していたのかに焦点をあて、第二子・由紀子～第七子・芙美子までを対象に、現金出納簿と日記を用いて、その実態を明らかにしたい。なお、長男の淑朗(1926年12月生まれ)は出納簿・日記記帳開始(1928年)時点で既に生まれていた。出納簿を見ると、淑朗は1歳を過ぎたばかりだったこともあり、1月7日「写真代 淑朗誕生記念トシテ10枚」9円(雑費に計上)、1月20日に「芸者代 永田弘 淑朗誕生ノ件」で12円32銭、22日に「魚代」70円と「土産用反物四反 婿入用」60円60銭などの支出が確認できる。このように、顕造が長男の誕生と成長を喜んでいたことが帳面から読み取れる。

まずは由紀子(1928年2月4日生)の出生時の様子を見ていこう。日記には、「今朝起キ出ル前ヨリ美世子シキリニ腹痛ヲ訴フ。モハヤ分娩ノ機ニテヤ。ニハカニ起キ出デタリ。正巳ニさだノ来ルベキヲ依頼セシモ八時ニモ来ラズ。依テ自身頼ミニ行ク。直グ来タリ。又左官(岡野栄一)ニ出会ヒタレバ鞍掛産婆ヲ依頼ス。丁度幸ナリキ。(中略—引用者)ニハカニ七時半頃ヨリ陣痛アルモノ、如シ。而シテ八時(正)ニナン女子ヲ目出度儲ケタリ。重荷ヲ下ロシタル氣イタス。ソレヨリ各方ニ通知ス。十一時前産婆帰ル。西伯父来リ歡ヲ述ブ。十二時前淑朗ト二人ニテ納戸ニ寝ル」とある。日記にある電報は、出納簿にも電報代として計上されている(2月4日「電報(黒田へ)」30銭、「同上(坂本へ)由紀子出生報知」65銭、いずれも雑費)。長女の誕生をいち早く親族に知らせようとしていたことが分かる。

出納簿の中で興味深い点として、2月3日、同8日、同16日、同29日に「カレー」がたびたび登場することが挙げられる。ちなみに他の月を見ると、カレーは4・5月に一回ずつのみとなっており、頻繁に登場する品目ではなかった。この由紀子誕生の月にのみカレーが頻出する背景として、顕造が自分と淑朗分(当時2歳)を用意したものではないかと考えられる。実際、2月8日の日記には「夕食淑朗ニ飯ヲ食ハセナドス 彼ハ余程癩癩モチナルモノノ如シ」との記述が見られ、顕造が息子の面倒を見ていたことが記録されている。他方で、人に子守を依頼する場合もあり、「子守タカ母に支払」(4月5日10円)といった支出も確認できる。

3月3日には「由紀子買物」として、酒(18円90銭)、菓子(1円20銭)、乾物(9円47銭)、茶(80銭)などが記載され(計41円97銭、臨時費)、「米子 主人 井上吉」との記載があることから、顕造が米子に行き買物をしていたことが分かる。日記を見ると、これは「由紀子メ上祝ノ用意」であった。祝いは3月6日に行われ、多くの親類が参加し(日記上では10名以上確認できる)、芸者2名を呼んでいた(3月7日「芸者ニ祝儀」7円、臨時費)。このほか、育児費中に多様な乳製品への支出が確認できる。8月1日に牛乳代(5円70銭)、同9日ラクトーゲン(1円30銭)、同14日ドライミルク(4円80銭)が見られる。なお、由紀子のお産補助を行った産婆には3月7日に礼として15円、女中(リヨウ)には7円を支払っている(臨時費)。このように、第二子の由紀子出産に際しては、米子への買い物によって出産と育児を両立させていたことが分かる。

次に、滋樹(1930年3月5日生)の出産について。3月5日の日記には「夜美世子産気付き

(夕食後)十時前無事出生せり」との記述が見られ、この記述が同じ日のうちを示すのであれば、比較的安産だったのではないかと思われる(由紀子出産は半日ほどかかっていた)。加えて日記には「発信 坂本電報」とあり、これは出納簿に「第三子出生 報告電報 坂本ニ」(65銭、雑費)とあり、由紀子のお産時と同様の行動が確認できる。また、産婆などへの謝礼も由紀子の時と同額であった(4月5日に産婆15円、リウ7円、臨時費)。翌日には3月6日「宗一をして米子に出させ魚野菜を求せしむ」とあり、この時も米子へ買い物に行かせていることが分かる。ただし、由紀子の時のような「カレー」は登場していない。恐慌の影響で家計収入が落ち込んでいたためか、出産祝い関係の支出も由紀子の時よりは控えめとなっている(魚代など計24円52銭。臨時費)。育児費中には、由紀子出産時から見られた牛乳(「ミルク」と書かれていることもある)、パトローゲン(粉ミルク)などの支出がほぼ毎月確認できる。

続いて、浩亮(1931年9月6日生)の出生について。日記では「第四子(男子)午前十一時出生」とのみあるだけで、生活に関する記述が少ない。この時、大幡村の恐慌対策として鮎出荷組合が結成され、顕造が組合長に担ぎ出されており、日野川で毎日のように鮎取りをし、疲弊していた様子が日記から窺い知れる(5月31日「明日ノ鮎掛ノ準備ヲナス」)。顕造が多忙となったためか、この年は、これまで由紀子、滋樹出産時に行われていた祝い(メ上祝)は行われなかったようである(臨時費に該当項目なし)。史料上では産婆への謝礼も確認できない<sup>29</sup>。このように子供の祝い事だけで見ても、この1930~31年にかけては矢田貝家の家計が収入の落ち込みにより、様々な制約を受けていたことが分かる。ただし、1931年12月14日の日記には「本日ハ淑朗ノ誕生日ニ該当シ、又浩亮ノ百日目、又由紀子ノ紐落ノ心持ヲナシテ写真屋ヲ呼ビテ午後記念撮影ヲナス」とあり、家計が逼迫する中でも子供の成長記録を残そうとしていることが見て取れる(12月21日、写真代6円70銭、臨時費)。

第五子にあたる、淳史(1934年6月4日生)の出生について日記を見ると、「男子出生。午後九時二十分。本日ハ河ニ行クモ憶怯〔億劫カ〕ニテ止ス。(中略—引用者)本村ノ増蔵婆死亡ニツキ(六時頃)行キシモ美世子腹具合オカシトノ女中ノ知ラセニ中途ニテ失敬ス。果シテ夕方ヨリ産氣付キ九時二十分無事ニ安産シタリ。男子ヲ分娩セリ。リウ、鞍掛共ニ間ニ合ウ」とある。このように日記の記述は従前に戻りつつあった。ただし、依然として川に鮎取りに行っている。そしてこの年も出産祝いは行われなかったが、産婆への謝礼は確認できる(7月12日15円、臨時費)。家計収支で見ると、この年は収入1万円台となり、若干の回復が見られた。これは小作料米収入が6千円台まで回復したことと、臨時収入として第二人の保険金が入ったこと(正巳:2月12日簡易保険金386.4円、3月16日保険料479.85円、清茂:4月14日簡易保険金385円)などが起因している。そうした収入の回復も手伝ってか、日記には「喫茶ス」が頻出するようになった。例えば、6月5日「出納戸ニテ喫茶ス」、6月6日「帰宅後産婆氏ト喫茶シ」などが見られる。この年、日記上で「喫茶」は40回以上(喫茶は40回、「茶」が、「茶」は70回以上登場する。また、雑費中に「キャラメル」「パン」「チョコレート」「ビスケット」「ラムネ」「アイスクリーム」「シュークリーム」「ケーキ」など多様な製菓への支出が見られる。それまでは「菓子」などと記載されていたが、この年頃から菓子の種類を具体的に掲載するようになった。

美智子(1936年3月1日生)の出生は日記には、3月1日「朝来美世子腹痛ノ由 出産ノ徴アリ 俄ニ心準備セリ 谷本ヨリ まつ来ル 完一溝口ニ走ル 産婆来ラザルニ無事出産 産後卅分位ニシテ鞍掛氏来ル 昼食後重利来リ自作農創設ニツキ保証人タラムコトヲ要請」とある。産婆が出産前に来なかったが、女中(まつ)の手助けにより出産したことが記録されている。ただし、産婆には通例通り謝礼を支払っている(4月2日15円)。この年の特徴的な支出には「オルガン、同腰掛」(3月10日57.5円、器具費)が見られる。子供も増え、淑朗(10歳)や由紀子(8歳)が成長して小学校に通うようになったことで、教育費・育児費とも増加し、家具(器具費)などでも子供関連の支出が見られるようになった。

最後に、美美子(1938年2月1日生)の出生について確認する。日記には「午後八時 美世子女子分娩(第三女)美美子 (午後一引用者)五時頃帰ル。帰レバ美世子愈々分娩期近ヅケルカ腹少シ痛シトノコト。早速谷本まつ、さだ等ヲ呼ビ吉城ニ溝口鞍掛ニ使ヒセシム。準備万端整フ。入浴中八時頃ニ割合ニ楽ニ女児ヲ分娩セリ。母子共ニ健全ナリ」とある。産婆への謝礼は通例通りだったが(15円)、女中のまつ・さだへの謝金が増額している(15円ずつ、雇用費)。前年の1937年の収支は赤字となっているが、矢田貝家の家計状況が改善され、積立金・預金を再開したこと、1938年の収入は1万円を超え、収支も2,300円近くの黒字となっている。家計の改善が見られたことが女中への謝金増額に繋がったものと思われる。さらに、美美子の出産直前(2月25日)に親戚(西伯母)も手伝いに来ており、美美子出産の翌日3月2日に「午後ハ世話ニナリタルまつ、さだ、産婆西伯母ニ贈ッルモノヲ包ミテ配ル」として、謝礼と併せて反物も送っている(3反11.2円、臨時費)。なお、美美子の名は「夜子供等ト共ニ幼児ノ名ヲ美美子ト決定セリ」(2月4日)とあるように、子供達と決めた。

美美子出産時には矢田貝家の家計や生活は良好に見られるが、既に前年に日中戦争が勃発して戦時期に入っており、日記には戦争関連の記事が多数見られる。例えば、1月11日の記事には「厚生省開設サル。御前会議開催。対支最高戦略略決定」とあり、2月21日「金田一戦傷セル由ニテ村中ザワメク」と記されている。この後も次々と戦死者・戦傷者の知らせが届いた。また5月28日には「淑、由、滋ノ三人出米。六、一二ノ列車ナリ。支那事变展見物ノ為」といった記述も見られる。このように矢田貝家の周辺でも戦争の影響が随所に見られた。

以上、出産の直前直後の記録にはなるが、現金出納簿と日記の記述から、矢田貝家の家族生活を見てきた。まず矢田貝家の出産は、戦前で一般的な自宅での出産であり、産婆による助産によって行われていた。矢田貝家の家計が良好な時には、子供の出産祝いや贈り物など奢侈的な支出も見られた。また親や弟を早期に失った顕造にとって、子供達への愛情は大きかった。顕造は家計が厳しい状況であっても、記念写真の撮影や子供用オルガンの購入などを行うほか、多額の教育費・修養費を支出しており、惜しみない教育投資を行っていたといえる。戦前日本は基本的に多産社会であったが、その中でも矢田貝家は非常に短期間に多子世帯となり、親・兄弟に頼れない状況で出産・育児に対応していた。それが可能であったのは、労働面では地域のローカルな労働市場からの女中・子守の調達と、牛乳・粉ミルクをはじめとする多様な財・サービスが提供される都市圏としての米子の存在が挙げられる。顕造は伝統的な地主経営を継承しつつ、その中でこれら市場にアクセスしながら、矢田貝家の家族人員を着実に増やし、

家の「再興」を達成したといえる。

また、1934年頃から多様な菓子製品を購入し、自宅茶室などにおいて「喫茶」を嗜むほか、1935年には扇風機を導入するなどが見られた。茶の嗜好は山陰地域で広く見られる文化で<sup>30</sup>、顕造が地域の伝統文化を受容していった過程であるといえる。他方で、西洋菓子や扇風機の購入は、近代における新たな消費であり<sup>31</sup>、昭和戦前期の矢田貝家の生活は伝統文化と西洋文化の両面の影響を受けた生活様式を体現するに至ったといえよう。

## 5. 矢田貝家の生活水準：帝大教授村川家との比較

本稿の最後に、矢田貝家はどのような経済階層であったかということを位置付けよう。その際に比較対象とするのは、東京帝国大学教授の村川堅固の家計である。村川家に関しては、浅野・村川が同家の家計簿を分析し、家計データが公表されている<sup>32</sup>。

なお、村川堅固は1875年生まれで、1930年時点で55歳であり、顕造より30歳近く年上でである。この全く異なる両者を比較する理由は、両者の所得水準が比較的近似していることと、複数の年次で所得データが得られることが挙げられる。

表8 矢田貝家と村川家の収入比較 単位：円

年次	矢田貝家(中規模地主)		村川家(帝大教授)	
	小作地収入	総収入	帝大俸給	総収入
1928	6,415	11,142	4,720	22,020
1929	6,382	13,195	4,695	17,518
1930	6,012	9,988	4,702	21,160
1931	3,962	13,649	4,605	14,164
1932	2,687	32,983	4,636	14,574
1933	5,528	9,505	4,629	14,455
1934	6,024	10,536	4,844	14,055
1935	3,447	9,347	11,211	19,995
1936	5,867	7,545	3,213	14,337
1937	4,331	5,223	2,142	12,239
1938	7,372	10,828	2,142	15,005
1939	11,564	12,933	2,142	13,963
1940	7,986	16,155	1,952	13,539
平均	5,968	12,541	4,279	15,925

出典：本稿・表1、浅野・村川『近代中流知識層の住まいと暮らし』岩田書院、2023年、207頁より作成。

注：村川は1935年に帝大を退官した。

両家の所得を比較したのが表8である。収入はそれぞれの本給(矢田貝家は小作地収入、村川家は帝大俸給)と総収入(本給と臨時収入などの合計)を挙げた。表8を見て分かるように、本給において矢田貝家は村川家よりもほとんどの年において上回っている。なお、総収入では村川家が多額となっているが、これは村川堅固が執筆に関わっていた教科書の印税収入があっ

たことによる<sup>33</sup>。こうした本給の比較で村川家が矢田貝家よりも低く算出されているのは、村川が1935年に帝大を退官したためだとの見方もあろう。そこで、村川の退官(1928~1934年、1935年は退職金を含むので除外)以前の帝大俸給の平均額を求めると、4,690円となる。したがって、村川が退官していなかったとしても、矢田貝家の本給(小作地収入)とは千円以上の開きがあった。

以上から、矢田貝顕造と村川堅固は30歳近く離れていたが、山陰の中規模地主の収入は帝大教授と十分に比肩しうるレベルであったことが分かる。もちろん、顕造をはじめ矢田貝家の人々が帝大教授の本給を把握していたとは考えにくい。ただし、同時代人として、地主経営の年収約6,000円、総収入約12,000円という所得水準の高さは十分に理解していたものと思われる。他の例として、1936年に内閣総理大臣だった広田弘毅の所得額は5,991円であった<sup>34</sup>。同じ年の矢田貝家の小作地収入は5,867円と肉薄している。山陰地域の中規模地主の本業収入だけで、首相の所得額に匹敵していた。

これらの事実は、矢田貝顕造が京都帝大進学を断念せざるを得なかった、地主という「家業の重み」も表しているといえよう<sup>35</sup>。やや単純な比較ではあるが、山陰の中規模地主は経済的に遅れた存在ではなく、近代の中で創出された「新中間層」では容易には到達しえない、東京帝大教授という村川のような存在でようやく同水準となるような経済階層であった。ただし戦前期の高所得層は、年間5万円を超えるような存在であったともされており<sup>36</sup>、その意味では矢田貝家は「旧中間層」の域を出ない存在であった。

## 6. おわりに

矢田貝家の家計と生活をまとめておわりに代えたい。本稿では矢田貝家の現金出納簿と日記を中心に分析を行い、山陰地域における中規模地主の生活を概観した。

まず収入においては、矢田貝家は当初小作地経営と株式投資を中心としていたが、昭和恐慌による経済的落ち込みや親類の借金の肩代わりなどによって、株式の大半を売却して、小作地経営に特化していった。昭和恐慌は中規模地主家計において、経営の主軸である小作地収入を半減以下にまで減らすほどのショックであった。とりわけ農村部では昭和恐慌の影響は長引いたことが知られており、矢田貝家の家計も1930年代半ばまで低迷することとなった。ただし、矢田貝家は小作地と株式投資が中心であったとはいえ、家産を切り売りすることで、総収入レベルでは生活水準を落とさずに生活を続けられた。

続いて支出では、矢田貝家は基本的には伝統的な農村の慎ましい生活をしていたといえる。子供の出産祝いなどではやや奢侈的な行動をとっていたといえるが、それも食や衣類などへの支出を可能な限り抑制し、家計費の3割近くを占める税金や公的費用(水利費や村入用費などの「義務費」)を負担していた。また邸宅の建設費用も一般農家と比較すれば、当然多額ではあったが、支出の水準そのものは家計に見合ったものであった。

他方で顕造は、カレーや菓子などの西洋食や扇風機のような先端的な家電も取り入れていた。その多くは米子への買い物や買い出しによって入手していた。また自宅の増改築とも関係するが、自宅に茶室を構えていた顕造は自宅で「喫茶」を満喫していた。そして矢田貝家はか

なりの高頻度で出産をしていたが、それは矢田貝家の一定の経済力を前提としながらも、近隣の女中や子守などのローカルな労働市場と、消費市場としての米子へのアクセスによって成立していた。矢田貝家は山陰農村に居住しながら、伝統的な消費と新たな消費の両面を享受していたといえる。

本稿の最後に、矢田貝家の生活水準を明らかにするために、東京帝国大学教授村川家との比較を行った。そして、矢田貝家の本業（小作地経営）の収入は帝大教授の本給と遜色ないレベルであった。そのことは他方で、顕造が家業の継承を強いられることとなった「家」の重みを可視化したといえる。

ただし本論で述べたように、本稿の分析には多くの制約や限界がある。本論で触れていないものを挙げれば、矢田貝家の資産運用の詳細（貸金など）や、村川家以外の事例との比較を行うことなどが挙げられる。本稿は矢田貝家の史料を活用してのための素描を行ったに過ぎない。こうした諸課題に答えるべく、引き続き矢田貝家文書の利活用を進めるとともに、山陰地域に残された多様な歴史資料を探索・利用することによって、「豊かな山陰」の歴史を解明する作業を続け、別稿を期したい。

## 注

- <sup>1</sup> 枚挙に暇がないが、後退期地主制研究に関する研究として、坂井好郎『日本地主制史研究序説』御茶の水書房、1978年、加瀬和俊「両大戦間期における地主制衰退の論理をめぐって：中村政則「近代日本地主制史研究」への疑問を手がかりとして」『歴史学研究』第486号、1980年、清水洋二「東北水稲単作地帯における中小地主経済の動向：地主制後退期を中心に」『社会科学研究』第31巻4号、東京大学社会科学研究所、1980年、大栗行昭『日本地主制の展開と構造』御茶の水書房、1997年、大栗行昭「日本地主制の展開に関する若干の論点」『農業史研究』第31・32号、1998年などが挙げられる。
- <sup>2</sup> 一例として、坂井『日本地主制史研究序説』には岐阜の60町歩地主の家計分析が含まれているが、それに対する書評では「なお、補章ではT家の地主家計分析がなされているが、ここでの書評の対象からは除外させていただく」として扱われていない（清水洋二「書評 坂井好郎『日本地主制史研究序説』」『土地制度史学会』第21巻第4号、1979年、74頁）。
- <sup>3</sup> 中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館、2018年。
- <sup>4</sup> 鳥取県立公文書館県史編さん室編（大川篤志編）『明治時代の消費生活：郡是・村是資料にみる鳥取の家計と食』（鳥取県史ブックレット3）鳥取県、2009年。
- <sup>5</sup> 例えば、国立国会図書館分類表（NDLC）の「農村－山陰地方」「中国地方－歴史」で見ても、近代以降の山陰地域史研究としては、山岡栄市編著『山陰農村の社会構造』（島根大学山陰文化研究所研究叢書第1号）東京大学出版会、1959年、相良英輔先生退職記念論集刊行会編『たたら製鉄・石見銀山と地域社会：近世近代の中国地方』清文堂出版、2008年、板垣貴志『牛と農村の近代史：家畜預託慣行の研究』思文閣出版、2013年などに限られる。
- <sup>6</sup> 古厩忠夫『裏日本：近代日本を問いなおす』岩波新書、1997年。
- <sup>7</sup> ここでは歴史研究が相対的に手薄であることを念頭に置いており、山陰の地域研究としては安達生恒や相川陽一などが挙げられる（安達生恒『過疎地再生の道』（農業・農民シリーズ安達生恒著作集4）日本経済評論社、1981年、相川陽一「現代山村の集落自治と存続条件：島根県浜田市弥栄町の事例から」坂口正彦・飯田恭編著『農村における結合関係の比較史：日本・中国・より広い世界』日本経済評論

社、2025年など)。

- 8 「推薦書」(ファイル名「矢田貝顕造履歴・功績調書」[主屋ナンド仏壇下タンス 1-8])。矢田貝家の家族の歴史について詳しくは、本誌所収の二階堂行宣・板垣貴志・齋藤邦明・柳澤京子「矢田貝家の歴史」を参照。
- 9 書簡などが多数残されている。それらの活用事例については本誌所収の板垣貴志「山陰地域の生活世界を史学する：矢田貝家調査プロジェクトの軌跡」を参照。
- 10 ここで、内閣統計局『家計調査』(1926・27、1931～40年)の支出分類を示すと、「飲食物費」「住居費」「光熱費」「被服費」「保健衛生費」「育児費」「教育費」「交通費」「通信運搬費」「文房具費」「負担費」「交際費」「収容娯楽費」「旅行費」「その他(冠婚葬祭費など)」「記入不備」であり、後に見るように矢田貝家の家計支出分類とはほぼ同じである。また、農家経済調査も挙げると、「住居費」「飲食物費※」「光熱動力費※」「被服費」「家具什器費」「教育費」「修養費」「交際費※」「嗜好費※」「娯楽費」「衛生費」「冠婚葬祭費」「諸負担」「負債利子」(「※」…現金と現物評価額の2系列のデータあり)となっている。
- 11 その他の収入項目は、「B 配当金・債権利札」「C 立替 貸付金回収」「D 利子」「E 交際」「F 借越金」「G 雑収入」「H 繰越金」「I 臨時収入」と分類されている。
- 12 その他の支出項目は、「2 諸払込金(株式・講・保険)」「3 器具費」「4 被服費」「5 図書費・新聞・帳簿」「6 賄費・炊事費」「7 電気費」「8 電話費」「9 義務費・区費・井手費」「10教育費」「11育児費」「12雇傭費」「13交際費・寄付」「14宛口関係費」「16雑費・通信費・日用品費」「17臨時費」と分類されている。そして、1928年のみ、「15養鶏費」「18衛生費」が設けられているが、それ以降、「雑費」などに計上されている。
- 13 1934年以降に集計を記さなくなった理由は現時点では不明であるが、区長などの公務が開始した翌年であり、これらによって多忙となったことが一因として考えられる。また1934年には、顕造の弟である清茂(3月13日)、正巳(1月27日)が亡くなったことも影響している可能性がある。
- 14 1928～30年は現金出納簿の記載方法に若干の試行錯誤があったといえる。これらの年の現金出納簿の書き始めには「予算表」とページ上部に書かれ、その下に1年分の収入(左側の頁)・支出(右側の頁)をそれぞれカテゴリーごとに集計して記載している。このように、現金出納簿の書き始めの頃は計画的に家計を管理しようとする意識が明瞭に読み取れる。しかしながら、昭和恐慌期以降、収支ともに不安定化していくと、そうした「予算」という書き方はされなくなり、「昭和〇年度収支計算表」という表題が付けられるようになった。ただし、本文で述べたように、カテゴリーごとの集計や収支計算は行われていない。
- 15 さらにいうと、1944年以降の家計記録は現金出納簿としては残されなくなるが、メモ書きのようなかたちで記録されている。ただし戦時中の紙不足も手伝ってか、裏紙などに非常に小さな文字で書かれており、判読が極めて困難である。第二次世界大戦後についても同様である。
- 16 収入全体を恒常収入(RI: Regular Income)と臨時収入(EI: Extra Income)に振り分けた。恒常収入は顕造が設定した収入分類(A～H)を足し合わせたもので、臨時収入は顕造が設定した収入分類(I)のままである。ただし「I」のままだとIncomeの略字と判別がつかないので、筆者が恒常収入の合計を「RI」、臨時収入を「EI」と分類した。この両者を足し合わせたのが、総収入(TI: Total Income)である(「TI」も筆者が作成したカテゴリー)。
- 17 この点は、地主の規模にかかわらず、他の後退期地主制研究の中でも摘されている(岩本純明「東北水田単作地帯における後退期地主経済の動向：秋田県200町歩地主塩田家を事例として」『鹿児島大学農学部学術報告』(30)、1980年など)。

- <sup>18</sup> 農地改革期の矢田貝家については、本誌所収の、拙稿「山陰の農地改革と地主：鳥取県西伯郡大幡村と矢田貝家を事例に」を参照。
- <sup>19</sup> 加瀬和俊編著『戦間期日本の家計調査：世帯の対応とその限界』東京大学社会科学研究所リサーチシリーズ No.57、2015年
- <sup>20</sup> 農家世帯内における女性労働力のあり方を検討したものに、谷本雅之「近代日本の世帯経済と女性労働：「小経営」における「従業」と「家事」」『大原社会問題研究所雑誌』（635・636）、2011年、また都市家計における裁縫の重要性を強調したものに、棚井仁「衣類消費と裁縫：「縫う」という行為に着目して」加瀬和俊編著『戦間期日本の家計調査：世帯の対応とその限界』東京大学社会科学研究所リサーチシリーズ No.57、2015年、第7章。
- <sup>21</sup> 矢田貝淑朗 [述]、二階堂行宣・中村尚史編『矢田貝淑朗オーラル・ヒストリー』交通協力会、2016年、矢田貝淑朗編著『証明近代化の失敗：国鉄貨物輸送』陸運経済新聞社、1985年。
- <sup>22</sup> 農家経済調査の教育費は、「学校教育を原則とするも学校の課程に付教師に就て教授を受くるが如き場合の費用をも含む」とある（「家計費」『農家経済調査 昭和6年度』農林省経済更生部、1934年、111-112頁）。その他、矢田貝家の育児費には粉ミルク代などが計上されているが、これは農家経済調査では飲食費に分類されていると考えられる。また子供の診察料は矢田貝家は育児費に計上しているが、農家経済調査では衛生費に含まれる。
- <sup>23</sup> 矢田貝家では女中の雇用は確認できるが、乳母がいたかは、現金出納簿の「雇用費」からは確認できない。女中が乳母の役割を担っていた可能性はあるが、牛乳やドライミルクの購入頻度の高さから見て、おそらく乳母はいなかったと考えられる。
- <sup>24</sup> 本誌所収の、藤木竜也「家相図・日記に繙く矢田貝家住宅：建築史学の視点から」を参照。
- <sup>25</sup> 筆者は別で明らかにしたように、戦前の家計調査は世帯人員に大きな変動があった場合（出産や死亡など）、調査対象から除外していた（齋藤邦明「戦前日本における家計調査の特質」『立教経済学研究』第69巻第5号、2015年）。その意味で、公的統計は世帯の変動がないことを前提としたデータであるという制約がある。
- <sup>26</sup> 前掲・藤木「家相図・日記に繙く矢田貝家住宅：建築史学の視点から」を参照。
- <sup>27</sup> ちなみに公的統計における「住居費」の規定は次の通りである。農家経済調査では、「住居費とは居住に必要な土地建物、井戸、門塀其の他一切の固定設備の修繕維持に要したる費用（年度末価額を増加せしむる場合は之を除く）及土地を除く其の他の減価額を謂ふ。而して減価額の計算法は農業経営費建物に対する原価計算法に準ず」と規定されている。他方で都市家計を対象とした家計調査においては、住居費は「家賃、住宅修繕費、水道費、家具什器及設備費」とされている。こうした点を踏まえると、矢田貝家の住宅関連支出を算出するにあたり、①庭園の費用を入れるか、②大工・左官などの雇用費を含めるか、③茶室関連の骨董品を入れるか、といった問題が出てくる。公的統計の住居費はいずれも低所得者の家計を捉える目的で設定されており、矢田貝家のような広大な住居・庭園を有していることや、人を雇用して住居の修繕を行うことなどは想定されていなかったと考えられる（戦前の都市は借家住まいが多く、農村部では家産としての家屋の継承がなされ、修繕も自前や共同作業で行われることが一般的であった）。その意味でも矢田貝家の経済階層は「中間層」の枠組みだけで捉えられず、高所得者層の行動様式も含めたものであったといえよう。本稿では①・②は住宅関連費用として計上し、③は除外した。
- <sup>28</sup> ここでの数値はあくまで参考値である。というのも、判読不能な文字や判読できても内容が特定できないものも多い。また日記には「大工」と記載されている日にちであっても、現金出納簿上は支払い

が発生していないケースがよくある（逆に、日記には大工の記載がないが、支払いが生じていることもある）。そのため、住宅関連支出を把握するためには日記・現金出納簿のほかに、書簡などで情報を補完する必要がある。

- <sup>29</sup> 産婆への謝礼が確認できないのは1931年のみである。この年を除いて、史料上は臨時費に「産婆謝礼」と記載されることが多いが、確認できないのが1931年のみであることを踏まえると、産婆を呼ばずに出産したのかもしれない。実際、1936年の美智子の出産時には産婆が出産の間に合わずに女中の手伝いだけで出産していることが確認できる。ただし美智子の時は産婆を呼んだため、出産には間に合わずとも謝礼は支払っている。
- <sup>30</sup> 鳥取県内務部『鳥取県勸業遠隔』鳥取県、1900年、79頁。
- <sup>31</sup> 戦前の家電製品の普及率は不明であるが、経済企画庁・内閣府『消費動向調査』において、扇風機の普及率は最も古いデータで1957年の21.6%とされる（平野聖「昭和後期における扇風機の発達：「松下精工」に見る製品開発事例研究」『川崎医療福祉学会誌』第19巻第1号、川崎医療福祉学会、2009年、159頁）。戦前においては、普及率はさらに低かったと考えられ、1930年代半ばの段階で自宅に電話・扇風機のある矢田貝家は、山陰地域の農村で突出して電化製品の導入が早かったと考えられる。なお、電話については、1944年3月末が戦前の加入者数のピークで108万であった（郵政省「第1部第1章第2節 公衆電気通信 2 電話」『昭和48年 通信白書』大蔵省印刷局、1973年、9頁）。
- <sup>32</sup> 浅野伸子・村川夏子『近代中流知識層の住まいと暮らし：帝大教授村川家の家計簿を読む』岩田書院、2023年。
- <sup>33</sup> 浅野伸子・村川夏子『近代中流知識層の住まいと暮らし』岩田書院、2023年、206頁。ただし教科書の印税収入は年によって大きく変動し、1928～1940年の間で、最高額は15,303円（1928年）で、最少額は4,600円（1940年）であった。
- <sup>34</sup> 谷沢弘毅『近代日本の所得分布と家族経済：高格差社会の個人計量経済学』日本図書センター、2004年、89-91頁。
- <sup>35</sup> 本誌所収の、二階堂・板垣・齋藤・柳澤「矢田貝家の歴史」を参照。
- <sup>36</sup> 谷沢弘毅『近代日本の所得分布と家族経済』日本図書センター、2004年、96-99頁。

## 文献

- 相川陽一「現代山村の集落自治と存続条件：鳥根県浜田市弥栄町の事例から」坂口正彦・飯田恭編著『農村における結合関係の比較史：日本・中国・より広い世界』日本経済評論社、2025年
- 浅野伸子・村川夏子『近代中流知識層の住まいと暮らし：帝大教授村川家の家計簿を読む』岩田書院、2023年
- 安達生恒『過疎地再生の道』（農業・農民シリーズ安達生恒著作集4）日本経済評論社、1981年
- 板垣貴志『牛と農村の近代史：家畜預託慣行の研究』思文閣出版、2013年
- 板垣貴志ほか編著『地域とつながる人文学の挑戦：山陰の文学・歴史学・考古学研究から考える』（山陰研究ブックレット7）鳥根大学法文学部山陰研究センター、2018年
- 大栗行昭『日本地主制の展開と構造』御茶の水書房、1997年
- 大栗行昭「日本地主制の展開に関する若干の論点」『農業史研究』第31・32号、1998年
- 加瀬和俊「両大戦間期における地主制衰退の論理をめぐって：中村政則「近代日本地主制史研究」への疑問を手がかりとして」『歴史学研究』第486号、1980年

- 加瀬和俊編著『戦間期日本の家計調査：世帯の対応とその限界』東京大学社会科学研究所リサーチシリーズ No.57、2015年
- 齋藤邦明「戦前日本における家計調査の特質」『立教経済学研究』第69巻第5号、2015年
- 坂井好郎『日本地主制史研究序説』御茶の水書房、1978年
- 相良英輔先生退職記念論集刊行会編『たたら製鉄・石見銀山と地域社会：近世近代の中国地方』清文堂出版、2008年
- 清水洋二「東北水稲単作地帯における中小地主経済の動向：地主制後退期を中心に」『社会科学研究』第31巻4号、東京大学社会科学研究所、1980年
- 清水洋二「書評 坂井好郎『日本地主制史研究序説』」『土地制度史学会』第21巻第4号、1979年
- 谷本雅之「近代日本の世帯経済と女性労働：「小経営」における「従業」と「家事」」『大原社会問題研究所雑誌』（635・636）、2011年
- 鳥取県立公文書館県史編さん室編（大川篤志編）『明治時代の消費生活：郡是・村是資料にみる鳥取の家計と食』（鳥取県史ブックレット3）鳥取県、2009年
- 中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館、2018年
- 平野聖「昭和後期における扇風機の発達：「松下精工」に見る製品開発事例研究」『川崎医療福祉学会誌』第19巻第1号、川崎医療福祉学会、2009年
- 谷沢弘毅『近代日本の所得分布と家族経済：高格差社会の個人計量経済史学』日本図書センター、2004年